手取川源流域におけるマス・イワナ漁について
－奥山人の渓流資源の利用例－その２

橘　　礼　吉

TROUT AND CHAR FISHING AT THE SOURCES OF THE TEDORI 2

Reikichi TACHIBANA

はじめに

本報告文は，同じ表題でサクラマス漁についてまとめた，その１（橘，2005）の続編である。副題で表記した奥山人とは，谷筋最奥居住者を指す。具体的には手取川本流での奥山人（最奥居住者）は，旧白峰村白峰（市ノ瀬・赤岩・三ツ谷・風嵐も白峰に属する）の人である。白山直下の出作り群市ノ瀬・赤岩・三ツ谷の人々は究極の奥山人で，標高約800ｍの居住地から白山御前峰2,702ｍまでの桁外れに広い山地，別な表現では県境分水嶺までの山地を思うままに利用できた。広大な源流奥山域には幾条もの渓流があり，マス・アマゴ・イワナの漁範囲も格段に広かった。その１（橘，2005）では，昭和９年（1934）の大水害前後に視点をおき，日本海より最奥居住地へ遡上してくるマスについて伝統的捕獲技術・用具，それを現金収入源，さらに自家用食料源としての活用等についてまとめた。

本報告では，イワナの伝統的捕獲技術，越境漁，さらには渓流漁が奥山人の生計にどのように寄与していたかについて，稀少な残存数値をもとに具体的に把握することを意図した。イワナの漁獲高推移及びイワナ釣場については，それぞれ，その１（橘，2005）の表２，図１を参照して理解深化をお願いしたい。なお文献で，その1と重複するものについては省略した。

イワナ

白峰村桑島の「明治八年物産・村費届」（白峰村史編集委員会，1959）に「鱒20本但１本ニ付価25銭・15銭，アマゴ500本但１本ニ付価７厘・５厘，イワナ200本但１本ニ付価８厘・５厘」と淡水魚漁獲高が記されている。統計数値の的確性は薄いにしても，サクラマスの残留型いわゆるアマゴとイワナの混棲状況は，牛首川桑島周辺は，漁獲高上の比較ではアマゴがイワナより多かった。これは，本流に発電所取水堰堤が施設される前で，マスは物理的障害がなかったので，盛んに遡っていたことを裏付けする数値である。イワナとアマゴの混棲は上流程イワナが増え，河内では半々か少しイワナが多かったのでないかと推察する。明治末より昭和初期にかけての両者の漁獲高推移では，全体的にイワナがアマゴを上回る傾向で，明治41年6.5倍，昭和７年5.7倍と桁外れにイワナが多い。昭和４年だけがアマゴがイワナを少し凌駕している（橘，2005，表２参照）。

白山温泉には，白山登山の折泊る者や，湯治で数日間泊る者がいた。特に平野部よりの湯治者は「イワナは川上の急流にすみ，勢い強いイワナはアマゴより精がつく」，「白山イワナを温泉で食わねば来た値打ちがない」として，食膳にお頭（かしら）付きの焼イワナがつくことを心待ちにしていた。したがって旅館側はアマゴよりイワナを好んだ。漁で稼ぐ者は，アマゴよりイワナに傾斜し，より源流域，より遠方の渓谷へ出漁し，釣り中心の漁をした。自家用の時は釣りの外，網漁もした。

昭和９年７月11日の大土石流は，特に宮谷・湯の谷・柳谷等の淡水魚にとって大天変地異であった。イワナは激流に強いので，泥水の少ない沢・小谷へ急傾斜をものともせず，緊急避難するように駆け登った。７月11日のイワナの生態について，加藤政治氏（明治43年生）は「イワナの山越え」という実体験を口述された。「自分の家は土石流で倒壊，家が

流失途中，茅屋根の破風から身を乗りだして脱出，九死に一生を得て高台の神社虫尾社へ辿りついた。河川敷より約100m高台にある神社境内の水たまりに，イワナが足の踏み場もない位にいた。自分は興奮していてイワナを数える気持の余裕はなかったが100～200本位が生きたままいたと記憶している。」牛首川本流は土石流でドロドロ状態なので，イワナは雨水が多く泥の少ない流れに逃げこんだ。豪雨は，神社への坂道を細い流れの極小の谷に変えたので，イワナは滝を登るように山道に入り，ピンピンと体を跳ね返して登ってきたのである。2日間，着の身着の儘，食物もなかったので虫尾社境内や沢・小谷の水溜りで「イワナ拾イ」をして飢えをしのいだ。年寄りより「大雨時イワナが山越えする」と聞いていたが本当のことだと思った。」同じような傾向は，土石流のなかった三ツ谷川へ本流よりイワナが急移動し，水害後は三ツ谷川でイワナが急増していた。

五十谷の出作り尾田清正氏（昭和6年生）によると，出作り住居の下ションベン坂で，大雨時，割と小さいイワナが五十谷川より登り，坂の途中にいるのを度々見るが，雨が止むと不思議にイワナも川に戻るもので，坂でイワナの死んだのを見たことがないという。このような豪雨・大雨の際，谷・沢・山道といわず水があれば遡る習性を観察して，イワナ釣りは，水が年中きれない細く微小な沢でも棲息地として，釣の対象場とすることになる。

河内のイワナ漁は，マス漁と同じく温泉旅館の本格営業とつながりが深く，宿泊者が増える初夏より本格的になる。役場でいう「漁業を主とするもの」の漁は釣りがおもである。自家用に捕る時は，おどし棒で抄網に追い込む漁や，闇夜の火振り漁をおこなっていた。

釣漁・釣竿　住家より1日かけての漁の釣竿は，竹の一本竿で約2間位の長さであった。泊りがけで県境分水嶺を超えて岐阜県側の庄川水系の大白川・尾上郷川への漁には，一本竿では長道で不便なので「竹の芯」という竹の先端3尺程を切ったものを持参，途中で自生クロモジで真っ直ぐなものを選んで「元竿」とする。漁に先だちクロモジの皮を剥ぎ，焚火で曲がりを調整し，麻糸で竹の芯と元竿を繋いで使用した。竿の長さは，使用渓谷の幅によって随時決めていた。

釣糸・釣針　赤岩には，砂防工事用資材を運搬する馬が数匹いた。馬のしっぽの毛を三筋程繋いで道糸とし，その先にテグス付自家製毛針を繋ぐ。毛針の羽毛は，山鳥・烏や鶏の毛を使い，時には仏壇用刷毛を年寄りの目を盗んで抜き使った。赤岩の加藤勇京（明治29年生）加藤政治（明治43年生）兄弟によればイワナ用毛針は，春には赤色系，夏は黒色系，秋は黒に白を混ぜた。またアマゴ用は，イワナより少し白を多く混ぜて巻いた。岐阜県側の大白川・尾上郷川のイワナは，河内より大きく，数多く釣れる。そこで羽毛は水中で1寸位に広がるように巻き，数も多く用意した。

漁期　山野に虫が出始めると毛針が効くので，5月下旬～6月上旬より始め，市ノ瀬の2軒の温泉旅館へ出した。毛針釣りも餌釣りも朝夕がよく釣れる。日中はあまり釣れないが曇った日は日中でも釣れる。どんより曇った日中で，風がなく毛針が自由に思うままに振れるのが，最高の毛針釣日和であった。大水害前は，7月下旬より8月の盆過ぎまでが登山シーズン最盛期で，2軒で1晩600人の宿泊が時々あり，この頃旅館はイワナを沢山ほしがった。この時期は真夏で，そして晴天が続くと最も釣れない時期でもある。この季節には水生昆虫のカワムシをとって餌釣りする時もあった。

10月初期には産卵期に入り，浅瀬で腹をすりだすと釣れなくなる。旅館側も閉湯近くなるので買ってくれなくなり漁には出なくなる。

釣場　赤岩の鈴木与三松氏（明治34年生）は，父親鈴木仙松氏と共に，大水害前まで河内ではマス・イワナ・アマゴを，岐阜県側でイワナを捕って生計を補っていた。他家から見れば川で稼いでいたので専業的漁師であり，役場でいう「漁業を主とするもの」である。イワナの釣場は，河内領域内の宮谷・湯の谷，柳谷は谷壁が崩れやすい地質で渕がすぐ埋まってしまい，魚影が少なかった。大水害時土石流が起らなかった岩屋俣谷・三ツ谷川は，適宜渕・瀬があり良く出かけた。

福井県側では，赤岩（標高約760m）より小原峠（標高1,410m）経由で九頭竜川支流・滝波川へ，杉峠（標高1,330m）経由で打波川へ日帰りで出かけていた。イワナ釣りは，親子でも同じ谷に二人はいると効率が悪く，常に単独漁である。水害前の釣果は，良くとれた日は30～40本，とれない日は10本位であった。

ところで鈴木与三松・仙松親子は，県境分水嶺を越え，宿泊してのイワナ釣りを年2・3回おこなっていた。鈴木仙松は岐阜県の尾上郷川へ，鈴木与三松は岐阜県の大白川へ出むいていた。尾上郷川と大

白川は，富山湾に注ぐ庄川源流の支流で，白山の別山を水源としている。尾上郷川は現在御母衣ダムに注いでいる。

岐阜県尾上郷川源流でのイワナ釣り　渓谷の源流は幅が狭くきりたっている。1人が釣っている横を追い越して上流へ行くと，イワナは追い越す人の動作を察知して隠れてしまい，釣れなくなる。常に，尾上郷川上流へは仙松が単独で，長男の与三松は大白川へ単独で行った。

赤岩（標高760m）より岩屋俣谷経由で別山南方の三ノ峰（2,128m）へ，当時は岩屋俣谷沿いに分水嶺三ノ峰へは登山道（今は廃道）があった。岐阜県境分水嶺を越えて尾上郷川本流へ下るにはカラスノウシロ谷を下っていく。尾上郷川源流域は他県・他集落（尾上郷）の領域だが，河内の人にとってワサビ栽培，クマ狩り，桧材の盗伐，イワナ釣り等で多様に稼げる場で，カラスノウシロ谷には河内の衆だけが利用した間道とまではいかないが踏跡がしっかりついていた。仙松は，サブ谷出合より少し下った本流左岸の天然岩窟（標高約1,040m）に2泊してイワナを追った。この岩窟は，河内の衆は「ナベ岩屋」といい，名称由来は常時宿泊するために鍋がおいてあった事だという。赤岩の加藤勇京氏（明治29年生）はこの岩屋に宿泊し，牛首峠経由で海上谷でワサビ栽培の体験をもつ。岩屋には鍋があり，谷には尺イワナが「ウヨウヨいた」という。鈴木仙松は行くのに1日弱，夕方より晩まで釣り，翌日は終日釣り，3日目は午前中を釣り，旅館の夕食に間に合うように帰る。イワナは内臓を抜き塩をふって石油1斗缶（空缶）の容器に積めて運び，旅館に売った。往路雪渓が残っている情況（年により消雪の時もある）を見つけ帰路この雪を缶に積めることもあった。標高2,000mを超す分水嶺を越え，約1,300mの高度差を，それも踏跡をたよりに歩き続けていく能力・技術は，住んでいる地域や先人より自然に学んだもので，奥山人の強靭な「徒歩力」とでも表現しておこう。徒歩力に頼った尾上郷川のイワナ釣りは，年2・3回であった。

仙松がイワナ釣りをしていたこの谷へ，昭和4年8月，京都大学OBの桑原武夫が富山県千垣の名案内人宇治長次郎をともなって入山，尾上郷川を遡行し，別山・御前峰に登り，中の川を下って尾添へ下山した。この時の記録が日本山岳会機関紙『山岳』第25年第1号にのっている。尾上郷川のイワナに関するものを抜粋し次にあげておく。

「サブ谷の少し下流左岸に小さな岩小屋があって，焼いた岩魚が沢山おいてあった。下の村のものはここまで来る筈はない。加賀の方面からはカラスノウシロ谷を通ってサブ谷のあたりまで釣りに来るものがあると聞いているが，その連中だろうか。…略…火をたいて昼食をとる。ここにも水涯に岩魚を一ぱいつめた魚籠がおいてある。沢山いるらしい。栄治と重松は股引を脱いで流れに入って岩の根元をさぐると見る間に四，五尾手づかみした。寝転んで煙草を吹かしていたわれわれも乗出し，とうとう川干しを始めた。大した豊漁でもなかったが，取りたてのを焼いて，もう一度飯を食べなおしていると，上流から飄然と一人の男が現れた。さきの岩小屋の主である。信州の島々から山越しにやってきて二日で四貫ばかり釣った。持って帰って上高地のお客に食わすのだという。尾上郷の名は，去年この谷へ四十日入っていた常さんに教わったと聞かされて驚いていると，その男は長次郎に，この夏烏帽子へ行くことはないか，もし行ったらそこの小屋番に島々の岩魚釣りがここで達者でいたと伝えてくれ，と頼んで別に名もいわずに谷を下っていった。魚を追うてただ一人名も知らぬ谷々をさまよう岩魚釣り，登山家などのまだ知らない思いがけぬ幽谷にまで彼等の足跡は印せられている。」

この記録で注目すべきは，桑原が雇った立山山麓の人がイワナを素手で捕ったこと，川の流れを替え水を干してイワナを捕ったこと。さらに岩屋に泊って漁をするイワナ釣りのことが具体的に描かれていて参考となる。この岩屋とは河内でいうナベ岩屋である。桑原が出会ったイワナ釣りの出身地長野県安曇村島々は，松本より上高地に至る中間地点に位置する。イワナ釣りは，高山経由できたとすれば野麦峠（1,672m），小鳥峠（1,002m），松ノ木峠（1,086m）を越えてきた。島々のイワナ釣りに情報提供をした常さんとは，岐阜県上宝村中尾出身の内野常次郎で名案内人である。中尾集落は，焼岳の飛騨側直下に位置する。内野は，中尾より平湯峠（1,684m）経由で高山へ，そして島々のイワナ釣りと同じルートで，二人共に100kmを優に越える陸路をイワナを求めて歩き通しているのは，現代人にとっては唖然とする距離の克服である。イワナが密度濃く棲息する尾上郷川源流域は，2,000mの分水嶺を越えてきた石川県白峰村河内の人ばかりでなく，遠く100kmを歩き通してきた長野県・岐阜県の漁師や山案内にとっては，峠の高度差や遠距離を克服する不便さはあって

も，かけがえのない現金稼ぎの場であった。ここでいう「奥山人」や，山を生業とする登山案内人・漁師は，平野在住者が及びもつかない「徒歩力」という技術・能力を地域・先人・職能集団により受け継いでいた。

このような高度差・遠距離克服のイワナ漁を可能にしたのは，サブ谷出合下流左岸のナベ岩屋の存在があったからである。岩屋は宿泊は勿論，雨天時には備付けの鍋で調理ができ，桑原の記録にもあるように獲物の保管等にも利用されている。ナベ岩屋の現地調査は，色々の事情があってできないのは残念である。後続の調査を待ちたいと思う。新潟県三面川の源流三面集落でも，イワナ漁の時宿泊した岩屋として，三面川支流の岩井又沢のミズカミの岩屋，ワカバソウ出合の岩屋が紹介されている。このように源流域の岩屋が，奥山人の生業と結びついて利用されてきた実態は，未調査のまま過ぎてきた傾向があり，注意を喚起したい。

岐阜県大白川源流でのイワナ釣り　父仙松は尾上郷川へ，長男鈴木与三松は一晩泊りで大白川へ出向いてイワナを釣った。大白川は庄川の支谷で尾上郷川より一つ下流の支谷である。赤岩（標高約760m）を暗がりに出発，いわゆる越前禅定道を通って白山室堂（2,450m），室堂より平瀬道を下って大白川に至るわけだが，上部は現在の登山ルートと違ってカンクラ雪渓を経由する。当時は，大白川ダムの少し上流に大白川温泉小屋（約1,150m）があり，おもにその下流や支谷で釣った。7月中旬から8月中旬にかけての釣りで，河川敷で流木を燃やしソラドマリという野宿をする。朝夕のオロロ（イヨシロオビアブ）の襲撃と夕立の鉄砲水に気をつかった。初日釣った魚は内臓を抜き塩をふって石油1斗缶の中へ入れる。翌日の釣りは，市ノ瀬温泉旅館の夕食膳にイワナが間に合うように段取りする。なお釣った魚は内臓は抜かずそのまま，途中のカンクラ雪渓で，持参の莫蓙を使って雪漬けして室堂・禅定道を急ぐ。このルートは尾上郷川の行程と違って，全行程が整備された登山道なので歩き易い。帰りは室堂まで2時間，特に室堂からの下り坂は走るように歩き2時間，雪の融けない間に旅館へ届けた。このコースの登山行程時間は9時間半，それを半分の4時間半で歩きつくす。水害前は年に3回は必ず行った。条件が良い時は120～150本・約3貫位は釣った。内臓を抜いたものは2割5分増しの重さで銭勘定する慣行で，1回の大白川行きで15円前後の収入，その時の土工1日の賃金は1円であったという。

イオジャクリーおどし棒と抄網の漁法ー　イワナをおどし棒を操って，円筒形の抄網に追いこんで捕る漁法である。河内では「イオジャクリ」，白峰本村周辺では「カブジャクリ」という。イオとは魚の方言である。漁具と技法については河内地方のものは聞きだせず，下田原セイシ山の出作り山口清志氏（昭和6年生），五十谷の出作り尾田清正氏（昭和6年生）の事例である。

円筒形抄網の縁木は，自生するモミジかクロモジ（山口），ネソかハゼ（尾田）を使い，直径は3～5尺（山口3尺，尾田5尺）程，網は冬場に麻糸で尻すぼまり状の円筒形に編む。おどし棒の長さは谷川の幅に応じて決める。下田原川・五十谷では約1間半位，ホウノキは真っ直ぐなので使うが弱いのが難点。棒の先にゼンマイの根株かぼろ切れを結びつける。ゼンマイの根は，シャクル毎に傷み易いので，ぼろ切れに，さらに黒洋がさ（いわゆるこうもりがさ）の布地へと変る。洋がさ生地は，軽く水をはじき痛まない。カブジャクリの「カブ」は，ゼンマイの根株のことを思っていたが，カブはカワウソの方言「カブソ」を略したもので，ゼンマイの根でカブソの頭に似せた形を作る。渕・川底の岩の切りこみ，岩と岩との隙間に，ゼンマイの根（カブソの頭）が入り易いように細長めの球形にした。

晴天で水が透んだ日は漁をしない。この条件ではイワナは人の動きを察知しやすく，奥深く隠れるからである。夕立で濁った水が増えた時，雨降りで外仕事ができず，川水の土濁りが澄んで薄濁りになった時に漁をした。網役は渕の下で構える。時には岩・石を移動させ，網の直径程に流れを狭める力仕事をして効率を良くする。シャクリ役は，イワナに察知されないように渕の上から，秘んでいる場所を棒でシャクリあげる。方言でシャクルとは，突くようにえぐる動作をいう。イワナはカワウソと勘違いして飛出し，別の場所に逃げこむ。さらに魚影を追ってシャクル。この時，イワナは瀬に逆って上流へはいかず必ず下流へ逃げる。これを抄網で捕るのである。抄網の縁木を持つ手は10本の指全部を使わず余分の指を数本余し，それを網の目に触れさせて待機する。このようにするとイワナが網に突っこんだ時の感触が，すぐさま網の目を掴んでいる指先でキャッチできるのである。

この漁は，大量出水後の薄濁りの時は効率が良く，一つの渕では必ず1本，さらに2・3本は捕った。

五十谷では親子で100本捕ったことが１回あり，下田原では直径１尺の丸型ブリキ製魚籠（カンカン）に一杯（約30本）になると漁は止めた。この漁を含めて３・４寸程度のものは川に放すことを守る慣行で，年寄りは「イワナが自分らの川に絶える」として口うるさく言っていた。雨あがりの薄濁り等の好条件の日は，多忙な仕事暦と重複することもあり，度々出漁することはなく年に１・２回，多くて３回位であったといい，いずれも出作りの自家用魚を捕る漁である。

ヨカワ（夜川）ー火振り漁ー　暗夜にタイマツをともし，イワナを，たも網・猟で捕る漁である。イワナは真っ暗な水中で強い光を受けると，目が働かなくなり動きが極端に鈍くなるのを捕るので，まず強力なタイマツが必要となる。河内で市販していた白山登山用の松明は，桧の油脂の多い部分の割木を束ねたもの。ヨカワのそれは，自家用で廃品利用のもの。まずアジャリ（シシウド）の太いものを刈りとる。アジャリには竹のような節があるので，この節を利用する。使い古しの廃品化タビノを細く裂く。タビノはガマの茎を編んだ山仕事向きの容器。ガマの茎はスポンジ状になっており液体をよく吸収する。それに燈油を染み込ましし，アジャリに差し込んで燈をともす（アジャリの櫛を利用してまず燈油を入れ，次に裂いたガマを差し込んでもよい）。アジャリに代って竹，ガマに代ってぼろ布でも良い。湿地に自生するシシウドの櫛，ガマの茎のスポンジ状形質をつかみ，二つを組み合わせて松明に活用している生活の知恵はすばらしい。後に，松明はカーバイトランプに変った（写真１）。

この漁は「月夜はだめ真っ暗な程良い」「風が強いと松明が消えるので風のない夜が良い」とする。

写真１　イワナヨカワ漁に使っていた漁具

上 カーバイトランプ，左 カンカン（魚籠），右 タモ（抄網）

風や滝のしぶきで火が消えるので，マッチが必需品であった。マッチを水気から守るには胸のポケットは漁で濡れてだめ，ズボンのポケットは谷川を渡渉または草木の夜露の中を歩くため濡れてだめである。そこでヨカワでは，手拭の中央にマッチをおいて折りたたみ首に巻く。この時マッチは顎の下でなくブンノクビ（首の背中部分）に位置するように巻いて漁をした。ビニール袋やライターがなかった時代の漁所作である。イワナを捕るには，たも網で抄う，猟で突くの二つの方法がある。猟の場合は「生かしておけない」「形の良い焼魚にできず煮魚にしかできない」等の理由で避ける人もいる。左手の松明でイワナを誘い，右手で網を持つ。たも網は直径約1尺，網口は銅線を円形にして網をつける。銅は柔らかいので，川底の状態に応じて直線状や曲線状に曲げ，川底との間に隙間がないようにできるのである。長さ１尺５寸位の柄をつけ，イワナを網で抄うより足で網に追いこむようにさばく。網の操作時，下流より上流に動かす時はもつれない。しかし流れに90度方向すなわち横，または上流より下流に動かす時は，渓流が早いのでもつれてしまう。だからヨカワのたも網には，網のもつれを防ぐため小石を一つ，網底に入れておかねばならない。石の大小は，流れの程度を見て直感して決めていた。

ヨカワは，夜が完全に更けてから始め翌朝の明け方までおこなう。顔特に鼻の穴は松明の煤で黒くなり体も疲れる漁だが，反面楽しさもあった。９月の盆祭り前（８月中旬は夏蚕の上簇期となるので盆は９月中旬，祭りと兼ねておこなった），奥山の出作りでは自家用と来客者へのイワナ料理のため，ブリキ製魚籠に一杯になるまで頑張った。つまりヨカワは，盆前に奥山の出作りの男衆が楽しさを兼ね，盆肴としてのイワナのため懸命におこなった漁でもあった。ちなみに河内では，イワナを盆肴とする慣行のほか，秋祭りや九月節供には塩マスを食べていた。

毒流し　植物の毒素を使ってイワナを捕る漁で，年寄りから「していかん，絶える」と強く言われているので，子供の時隠れてやった（昭和１桁生）。秋，大人の目を盗んで古鍋でクルミの皮・ナシ皮を強火で，皮がドロドロ状になるまで煮る。これをブリキの魚籠の中へ入れ，渕の上より流し入れる。クルミの実が熟す頃は，渓流の水量は年中で最も少なくクルミの毒がよく効き，イワナは腹を上にして，ゆらゆら下流に流れてくるのを抄う。小さいのは死ぬ。

毒流しのイワナを焼くとすぐ魚皮がはがれ，食べる時気持良いものではない。五十谷では，クルミの皮とトチの実の外皮を一緒に煮だしても良いと聞いている。

下田原川の毒流しは，クルミの皮やムラダテ（クロバナヒキオコシ）を使った。子供仲間でムラダテを刈りとり，渕の上で平ったい石の上に葉・茎を置き足で力強く踏み潰し，その青汁を流し込むと，イワナが酔った状態になって水面に浮いてくるのを捕った。クルミの皮は大量のタンニンとヒドロユグロンを含み，クロバナヒキオコシはディテルペンを含んでいる。

最後の川漁師尾田玉之助氏

尾田氏（写真２）は大正９年生，旧白峰村大道谷堂の森，本村白峰より離れた山中に居を構えていた。イワナ釣りを専業としたのは昭和38年43才時農協職員を辞めたのが機である。最後の川漁師といわれた尾田氏は，平成４年72才で死去された。本人と夫人光子氏が語られたイワナ事情の一部を紹介する。

イワナ釣りを始めた最初は，登山者・観光客が来村する６月より８月にかけては，釣っても釣っても足りず，釣った当日すぐ売りつくした。ところが養魚場が白山麓，さらには昭和40年村内にできるとイワナ事情が変ってきた。「養殖物は天然物より安い」「大小の型が揃っている」「いつでも購入できる」等の条件で，釣った天然物イワナは不利となってきた。補足すれば，釣ったものはその日に売れなくなり，生かして持ち帰り飼育池で中間飼育し，注文があると生魚を出荷するように変った。そこで尾田氏の命題は，釣った魚を全部生きたまま飼育池まで運ばねばならないことになった。漁法はミミズを使った餌釣りで，チョウチン釣りを基本とした。チョウチン釣りとは，道糸の長さが釣竿に比べて極端に短く，それが柄付きのほおずき提燈の形に似ているのが名称由来である。この方式は，幅の狭い沢や小谷でするのが原則である。尾田氏の狙いは，道糸を長くするとイワナが餌・針を深く呑みこみ，これを外す時無理すると死の原因になるので，道糸を短くすると同時に弛みを作らない技法で，針を外し易くしたのである。釣った魚は，タマネギ等の野菜を入れた赤色・緑色の網を廃品利用，袋状に縫い合わせこの中へ５・６本ずつ入れて谷川に漬けておき，帰路この化繊袋を次々と回収する。出漁すれば２・３kg（１本は70～100g）を釣った。

写真２　手取川源流の最後のイワナ職漁師
故 尾田玉之助氏

回収した魚は考案のブリキ容器に入れる。山中の畑に尿肥を背負い運搬する桶にヒントをえて，楕円状筒ともいうべき形で，水約12ℓがはいる。背中に当る部分は体に沿うようにカーブをつけ，リュック型の背負い紐で担ぐ。両手が空き滝の高巻き等便利良かった。漁場へは90ccバイクで行く。荷台には，直方形蓋付きのブリキ缶（石油１斗缶2/3位）が固定してある。釣ったイワナはリュック型容器と荷台のブリキ缶とに二分し，家の飼育池まで運ぶ。小分けすることによって酸欠死を減らすのである。飼育池は４畳半位の広さニジマス養殖を兼ね，イワナは木箱型生簀の中で旅館・民宿の注文を待つのである。

最も嬉しかったのは，イワナが棲息していない魚止滝上流へ釣った魚を放流，２・３年後に増えたイワナを一人で釣ったこと。最も悲しかったのは，渓流のイワナ産卵場に工事用重機が入り，卵が土砂で埋まり孵化できず死滅したことだという。

積雪期にはクマ巻狩りで，谷からクマを追いあげるセコ役をした。鉄砲打ち役には魅力がなく生涯セコ役を通した。イワナ釣りは「人と魚の化かしあい」クマ狩りは「クマとの化かしあい」，共に魚と動物の動きを先取りしなければならず，それが醍醐味だという。

昭和63年５月体の急な不調を機に，専業のイワナ釣りをやめた。その前年昭和62年，67才時の「収支明細書」の記録より漁関係のものを抜粋したのが表１である。当時イワナ生魚は1kg3,000円，イワナ収入金額は注文に応じた出荷額である。その他には秋のトチの実，春の山菜等の売上高，外来釣人のガイド料等の収入があった。釣りを専業とした43才時には，体力も強くイワナの棲息密度も濃く，１回の出

表１　旧白峰村大道谷堂の森の川漁師67才時の粗収入

月	淡水魚売上高（イワナ･ニジマス）	その他の収入		計
		金　額	備　　考	
1				
2	4,320円	33,600円	トチの実	37,920円
3	4,320円			4,320円
4	26,320円	20,000円	ガイド料	46,320円
5	27,120円	10,000円 2,000円	ガイド料 ウド･アザミ	39,120円
6	117,930円	8,000円 1,000円	ウド･フキ･カタハ ミミズ	126,930円
7	148,840円	10,000円 5,300円	ガイド料 フキ	164,140円
8	106,460円	10,000円	ガイド料	116,460円
9	44,830円	280,510円	トチの実	325,340円
10	76,590円			76,590円
11	59,920円			59,920円
12	87,710円			87,710円
計	704,360円	380,410円		1,084,770円

昭和62年収支明細書より抜粋

漁で10kgの釣果は稀でなく生業として成り立っていた。67才時は，個人的には年金収入もあって生業への意気込みから生き甲斐に代り，収支では副業化していたように思える。

昭和58年村内に漁業組合が設立・許可される。外来者に味覚と体験を兼ねた渓流釣りを中心とした観光策が目論まれ，そして稚魚放流，遊魚券発行がおこなわれる。尾田氏自身は組合員であるので放流魚は釣れるわけだが，個人が釣りを生業とすることと，渓流釣りを観光策として来村者を増やす主旨とは相容れないため，後ろめたい気持ちになり沢山釣っても，すっきりしない心情にかられることになった。魚影のない谷へ，自分が放流増殖をはかった場所へも，制度上は入漁料を払わねばならなくなったのである。つまり専業のイワナ釣師が，自由奔放に渓流を跋渉する時代は終ったのである。「釣っていてもすっきりしない」という心情が，釣りという行為へ歩を進める力を減退させ，生業をやめることになった。

奥山人の渓流漁と生計

白山の奥山で，マス・イワナ等の稼ぎで生計を助けていた者の数は，明治18年『皇国地誌』残簡本（古川，1987）と大正６～９年の白峰村役場資料で見ることができる。『皇国地誌』では白峰村白峰について「漁業を兼する者」は全516戸中13戸である。因みに白山麓の他集落には該当者の記載はない。大正期役場資料では，村内で「漁業を主とする者」「漁業を従とする者」に分け，主とする者の最多戸数は大正８年３戸，従とする者の最多戸数は大正９年36戸である。大正８年全戸数は594戸，この中約40戸が淡水魚で幾ばくかの現金を稼いでいた。約40戸は，多分白山温泉で換金し易い河内の奥山人だったと推察する。

市ノ瀬白山温泉白山館の経営者加藤岌氏（明治34年生）によれば，大水害前２軒合わせての年間宿泊人数は6,000～7,000人，１泊３食付２円，客はマスの塩焼，イワナの刺身，イワナのお頭（かしら）付き塩焼を好んだ。白山館のまかないを仕切っていた加藤せん氏（岌氏の夫人，明治41年生）によれば，夏山登山期には仲居８人を雇い，イワナは常時100貫位を用意していたという。「漁業を主とする者」「従とする者」が淡水魚で稼ぎができたのは，マス・イワナを多く消費してくれる温泉旅館２軒が市ノ瀬にあったからこそである。すなわち奥山人の渓流漁を支えたのは，現代的表現でいう秘湯，山間僻地温泉の存在が大きい。

同じように渓流淡水魚を温泉場へ運んで換金化していた事例は，他地域にもあった。信濃川支流中津川源流通称「秋山郷」では，イワナは志賀高原の発哺温泉へ，小赤沢・秋山のマスは遠く草津温泉一井（いちい）屋へ運んで換金していた（市川，1961）。また，桑原武夫が，白山・別山直下の尾上郷川で出会った長野県島々のイワナ釣りは，上高地の旅館へ持込んで

いた。

河内三ツ谷に在住し昭和11年22才時に離村した加藤政則氏（大正４年生）は，在村時若かったがイワナ釣りの名手といわれた。「雨あがりの時は１日６～8kgを釣り，毎年６～８月にかけて温泉旅館へ約100kgを売った。当時は100匁55銭・1kg１円47銭だった」と回顧している（加藤，1986）。イワナ100匁55銭だったのは役場資料では昭和７年である。この年の白米１石は26.4円，だからイワナ100kg147円は米約５石６斗分に当る。河内赤岩の鈴木与三松は，大白川へ泊りがけで出漁し，イワナ３貫位15円の粗収入だった。この出漁を大水害前の昭和８年と仮定すると，白米１升25銭なのでイワナ粗収入15円は米６斗分に相当する。河内三ツ谷の焼畑出作りが年間に購入した米の量について，林茂家所蔵の「大正２年11月改大福帳」より算出すると，11戸平均18斗２升である。河内三ツ谷での１戸平均米購入量18斗２升は大正初期のデータ，イワナ釣り年間漁獲高の米換算値５石６斗は昭和初期のデータ，両者を比較するには時代差が開き過ぎであるが，優秀なイワナ釣りは割得な生業であったことは数値から理解できると思う。イワナ釣りが割得であったことを正直に語っている人物として，他地域ではあるが信州秋山郷屋敷の猟師山田亀太郎氏（大正元年生）がいる。外川（雑魚川支流）では最高10貫184匹も釣った。イワナは渋温泉・湯田中温泉へ自ら運んで換金し，「金に困ればイワナ釣りをした」と口述されている（山田亀太郎・ハルエ述，1983）。

マスの釣果を探るための数値，さらにはマス・イワナの両者の稼ぎを比較するための数値も乏しかった。明治８年マス１本は15～25銭，対するにイワナ１本は５～８厘であった（白峰村史編集委員会，1959）。価格上マス１本はイワナ約30本に相当する。「漁業を主とする者」「従とする者」もイワナよりマス漁に傾斜していたと推察する。明治８年の玄米価格に換算すると小型のマス15銭は玄米２升，大型のマス25銭は玄米３升４合に相当する。この米換算値が当時の１日労賃とくらべて割得であったかどうかは，資料がないので分からない。

あとがき

渓流魚を捕っていた白山直下，手取川源流域の人々が，なりわいの一部としてどれ位の現金収入，どれ位の漁獲高があったのかを数値的にとらえ，より具体的な実態の記録をめざし，数値・統計の探索に努めたが，十分とはいかなかった。

マスは，在来のイワナや哺乳動物と異なり，海から奥山へと遡上してくる回遊魚であり，その数も年毎に変動がみられるという不安定要素をもった資源である。また河口から源流までの途中，遡上障害が発生すると，奥山では消えてしまう資源でもある。巨視的には，電力消費地としての京浜・阪神・太平洋ベルト地域の工業地帯へ送電距離が短くてすむ中部地方の日本海側河川に水力発電所・ダムが建設され，これら河川源流域では，手取川と同じように渓流資源としてのマスは姿を消した。この傾向は太平洋戦争後も続き，発電用・多目的ダム建設によるマス遡上停止現象は，阿賀野上流只見川や，最近では三面川へと北上している。マス漁に関する民俗は，マス遡上停止が進行する中で大型哺乳動物の狩猟伝承程ではないが，伝承的情報の中に入ってしまい，その漁法・漁具は過去の体験が語られる状態になった。

日本海側北部の河川は，高度経済成長期1960年前半頃まで，ダムが未着工であったので残存情報も多い。この事に注目し，北方から順には雄物川支流桧木内川と最上川源流は野本寛一氏（1999），三面川と支流高根川については酒井和夫・山崎裕子の両氏（1978）・田口洋美氏（1984）・赤羽正春氏（1999），只見川については佐々木長生氏（1997）等が調査された。奥山のマス漁に言及，世に広めたのは『秋山記行』の鈴木牧之であるが，それ以降民俗的視点の調査は最上孝敬氏（『西郊民俗』39号，1939）の報告を除けばなかったに等しい。マスの源流域への遡上数増加が見込まれない昨今，先駆的調査研究とその記録は，非常に貴重である。

手取川のマス漁については，旧三ツ谷林茂家の「大福帳」記載より，殆どを地元旅館で換金していた事，今宿山山麓のマス漁集団がそのまま積雪期の狩猟集団になっていた事，塩マスを９月の秋祭り，10月の秋の節供の儀礼食としていた事，マス飯鮨を正月元旦に初物（はつもの）食いをしていた事等，さらに離村移住先でもマス飯鮨の慣行が続いている事等を把握した。これらマスに関する民俗は，既に先駆者が解明された枠内のものである。手取川のマス漁に関する実態は，日本海側河川源流のマス漁の南限の可能性とでも位置付けることの提言で，諒としてほしい。

イワナ釣りについては，石川県白峰村より白山・別山の分水嶺を越えて岐阜県の庄川水系の尾上郷川・大白川へ，また長野県安曇郡島々，岐阜県焼岳

直下中尾より尾上郷川へ遠距離出漁をしていた事は，奥山人の「徒歩力」に負うところとした。千葉徳爾氏は，山村の人々が生業のため遠くへ出かけるのは，居住地周辺に資源が枯渇するからで，その最大因として「資源の掠奪」をあげ，事例として能登の漆掻き，東北の野獣を追う人々，さらには白山麓の焼畑出作り民をあげている。そしてこれら集団は，元来居住地を固定化できないという本質をもち，その属性として「移動に堪える特性」をもつとしている（『民俗と地域形成』1966）。イワナ釣りは，イワナの自然繁殖にだけ依存するなりわいで，千葉氏のいう掠奪的生業にあたり，またイワナ釣りの遠距離克服は，職能集団がもつ宿命的能力そのものと位置付けはできる。

多様な山地資源の一つとして水資源がある。源流水をペットボトルに入れ商品化したのは最近のことで，古くからはワサビ田の水源として奥山人のなりわいを助けてきた。次回は白山直下のワサビ田の調査を期している。

調査にあたっては，県内外の多くの方々より貴重な情報の御教示を受けた。世話になった次の方々に，厚く感謝申しあげたい（敬称略）。収蔵資料閲覧の便を与えていただいた白山ろく民俗資料館・白山市白峰支所，「捕鱒の図」の見聞機会の便を与えていただいた住安嘉裕，文献資料の提供をいただいた佐々木長生・大門　哲，聞取り調査に応じていただいた織田寛嗣・加藤政治・加藤せん・加藤　岥・加藤勇京・杉田清隆・鈴木与三松・坪田純雄・林茂・尾田清正・尾田玉之助・尾田光子・毛利千春・山口一男・山口清志。これらの中には，既に故人となられた方もおられ，御冥福を祈るものである。

文　献

千葉徳爾（1966）民族と地域形成，風間書房，367.

桑原武夫（1936）尾上郷川と中ノ川．登山の文化史，平凡社，64－99.

古川　脩（1887）1885年編纂 皇国地誌加賀国能美郡村誌白山麓第貳之巻．75.（私家版）

市川健夫（1961）秘境秋山郷平家の谷，64－65，令文社.

荘川村史編集委員会（1975）荘川村の生業・漁労．荘川村史下巻，146－148．荘川村役場.

白峰村史編集委員会（1959）古文書選集．白峰村史下巻，白峰村役場，857－860.

竹内理三・高柳光寿（1966）角川日本史辞典.

橘　礼吉（2005）手取川源流域におけるマス・イワナ漁について－奥山人の渓流資源の利用例－その１．石川県白山自然保護センター研究報告，**32**，55－66.

山田亀太郎・ハルエ述（1983）山と猟師と焼畑の谷－秋山郷に生きた猟師の詩－，72－80．白日社.

明治８年，昭和７・８年の米価は，『角川日本史辞典』（1966）の米価表より算出した.